

# 第26回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生【ライブ版】

2024(令和6)年2月8日(木) 会場 円徳寺

## 講題 :『教行信証』 信巻 善導三心釈 顕彰隠密

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

どうもこんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。  
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。  
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。  
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の  
ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。  
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わく  
は如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

## 講義 1

こんにちは、新年明けて初めての学習会だそうです。お元気そうで何よりです。大変な年明けでしたね。地震はあるし、飛行機事故はあるし、小倉は燃えるし大変な年明けでしたが、まあしっかり勉強しましょう。いつでも死んで行ける者のになる方が近道や。仏教を勉強して、どんな事が起きるかわからへん、この世は。いつでも死んで行ける、自分の人生に手を合わせて、嬉しかった有難かったと言えるような者に成ることね、それが近道やと思うよ。まあ一生懸命また今年も勉強して行きたいと思います。

昨日、一昨日、四国におりました。だから何処におるかようわからん最近。四国は天気が良くて、しかしやっぱり日本中お同行はいらっしやって沢山の方が来て下さって質問して下さって、まあ大変楽しい会でした。気が付いたら3時間位べらべらしゃべってました質問も入れて。まあまあ、今日は皆さんと一緒に本格的に『教行信証』を読みますから、難しいと思います。難しいと思いますが本当の事を言っていますから、どっかこの心に響くとか、何か「ああっ」という、ようわからんけど、全くわからんけど帰る時なんか元気やと、それでいい。本当の仏教はそんなもんや。理解はわからんけど、「ああ来て良かったなあと思ったら元気出た」。それでいい。それでいいと思う。まあ、親鸞聖人はそういう方です。

つまり『教行信証』は大変な学問的な操作をしながら、まあ親鸞聖人の信仰の糧をぶつけてるわ

けですね。こちら側にそれだけの力が無いために、何を言っているかようわからんけども、しかしよく読んで行けば大変大事なことをおっしゃっていると思います。

今、皆さんと一緒に拝読している所は、善導大師の三心釈ですね。ここは今日も出てきますが、二種深信が中心になるでしょ。二種深信は皆さんわかりますね、機の深信、法の深信、

**「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫(こうごう)より已来(このかた)、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。そして「かの阿弥陀仏の四十八願は…」**

(東聖典215頁、西217～、島12-59～)

というふうに、この人間の自力では仏様の世界には橋が架からない。けども、法蔵菩薩の方から橋を架けてくださっている。南無阿弥陀仏一つをあなた達にプレゼントするから、この念仏によって我々の娑婆を超えた仏様の大きな世界に目を開いて欲しい。向こうの方から橋が架かっている。その翻りを説く所ですから、そう言う意味では仏教で一番要になるところ、『観経』の核心になる所。それから『観経』で自力を尽くして至誠心を尽くしなさい、深心を持ちなさい、回向発願心を持ちなさいというふうに自力を励まし策励する。『観経』ではね。表向きには自力を励まし自力を進める、表向きにはね。

しかし、今言ったように善導大師がこの間も読みましたね、至誠心釈の所では「人間がする事の全ては雑毒の善である」。そして、「その雑毒の善では浄土に生まれることは不可である」と、はっきりおっしゃってますね。そして、「法蔵菩薩の真実心に目覚めなさい」というように、この至誠心は『大経』で言えば、法蔵菩薩の真実心は至心です。至心・信樂・欲生ね、「至心に信樂して我が国に生まれんと欲(おも)え」とこう言うわけですから、人間の自力では絶対に救われないと。

曇鸞の『論註』によれば、どれだけ言っても自力で考える、どれだけ言っても自力で頑張る、どれだけ説明しても理解をしようとする。だからもうあなた達には救う手立てがないから、私が真実心になります。こう言って、至心・信樂・欲生と。実は『観経』は全て自力を勧め・励み・頑張れと、こう釈尊が教えてくださっている。釈尊の要門や。要門というのは必要な門や。何に必要なか、本願に目覚めるために必要な門だから要門。そして、ここに自力無効という事を通して、至誠心は実は『大経』の至心に、法蔵菩薩の真実心に目覚めていく。深心は『大経』で言えば法蔵菩薩その方が私の主体と成ってくれた。信樂・信心となってくれた。そしてその他力の信心によって浄土を願生する、欲生というふうに、『観経』から『大経』へと、こういう展開がある訳ですね。

こちら側(『観経』至誠心・深心・回向発願心)は釈尊の要門。こちら側(『大経』至心・信樂・欲生)は阿弥陀の弘願。こういうふうな関係になっているのですよという事を背景にしながら、三一問答の助走にしているわけです。三一問答といきなり至心・信樂・欲生が私たちの手に入るわけじゃない。そうじゃなくて、聞法の苦勞を通して、やがて本願の真実に目覚めていくという事があるのだと。だからこっち(『観経』至誠心・深心・回向発願心：要門)、やっぱり大事なのよ。聞法の苦勞を通さなければ、『大経』の本願に目覚めていく事はないのだと。

先ほどもね、控室に来てくださった方が、大変大事なことをおっしゃってくださいました。「私は仏教はよくまだわかってないのだけど、若い時から求める心だけはあります」とおっしゃった。そうそう、それ大事。ここに来ておられる皆さん方もきっとそうだと思うね。そうじゃないとこんな天気の良い日に来んやろう(笑)。それかよっぽど暇かどっちかじゃ(笑)。いいかね、求める心。説明したらあかんのや。それが最終的な答えになります。そうでなければこのままの救いにならないから。そうやね。逆に求める心が無かったら仏教は実現しない。観念になります。勉強して理解す

ることになる。そうじゃない、求める心の意味がわかっていくんだ。これ以上言わない方がいいと思う。

最初は一生懸命、仏さんに助けて欲しいと思うところから出発するでしょう。どうしても「私を助けて」と、こう思う。だから、どうしても仏様は外に、西の方において、私以外のところから私を助けてくださると、こう思うて出発しようが。最初はだれでもそうやね。ところがちょこっと人生につまずいて、みなさんも顔に皺があるぐらいはつまずいところが（笑）。私みたいに、つまずきっぱなしやけど、ちょこっと人生につまずいて、なあ、どうにもならんようになってくるような事を通して、ううん、どうでしょうね、仏様が言っているように、ひょっとしたら「自力こそ地獄の元や」という事が段々わかってくる。けれども、求める心は消えない、やっぱり救われたい。そしてやがて先生の教えを通して、ああ自力こそ地獄の元だという事が決定して、南無阿弥陀仏と頭が下がった。念仏一つでいいんだと知って頭が下がった。そこに初めて今日皆さんと勉強する「二種深信」が出て来るね。

それは求める心が、十九願の求める心から二十願の求める心に、求める心が純化されていくのよ。求道というのは、一生懸命外側に仏様を求めて、助けてくれと一生懸命求めていくね。しかし、実際は自分の求める心の意味がわかっていくわけや。そやね。外ばかり向いて誠に申し訳なかったと、初めてこっち側に目が向いて頭が下がる。しかし、身は十八願にならんから、十八願の世界に包まれたとしても、この身はどうにもならん。だから、二十願の機だと言うしかない。けども、この信心は十八願の世界に開かれているのだから、「二十願の身のまんまで十八願の中にある」というふうに、実は求道は一生懸命自分を救う法を求めているのだけど、それによって実はこっち側の求める心が純粹になっていっている。十九願から二十願に、二十願から十八願に通じてしまった。というところに救いがあるわけだから、求める心の中に答えがあります。そうでなければこのままの救いにならんから、どっかから持って来なあかん。そういうことやね、まあそういうことです。

わかる人はわかるし、わからん人はわからん。けど必ずわかるはずです。そもそも良く考えてごらん、人間に一生変わらん心なんかないぞ。ね、人間に一生変わらん心なんかなかろうが。最愛の奥さんと結婚してなあ、結婚式の時に誓いを立てようが、嘘やあれは（笑）、「一生愛します」言うて、直ぐ浮気する（笑）。けど、求める心だけは消えんぞ。それは最終的には、それこそが法蔵菩薩の本願なんやということがわかるまで聞法しなさい。そうやな。自分の中に無限な心があった。自分の中に無限に私を押し出してた。それは自力の努力やと思うとったけど、本当は本願の心なんだという事がわかるまで聞法しなさい。それが本当の仏教というもんや。自分以外のものに救われるんじゃない。信心に救われる。自分の信心に。求める心が最初は娑婆のことばかり求めとろう。その内に仏法を求めるようになり、その内に浄土を求めるようになり、その内に本願なのだわかる。それが救いや。だから、求める心の中に最初から答えがあるから、「求める心がある」とおっしゃったから私は嬉しかった、今日。もうこれで帰ってもいいやと思って（笑）、今日は思うたことでした。

これそうやろう、よう見てごらん。自力の一生懸命頑張っている心は、最後には他力やったんやと言ってるやん。そうやね、そうやろう。そういう大きな背景を持ちながら、三一問答の助走にしているわけです。親鸞聖人偉かろう。わかりますね、言っていることは。

それで、それを教えて下さったのは善導大師やと。こう言うわけです。親鸞聖人はね。善導大師という人は偉い人でね、素晴らしい天才ですよ。親鸞聖人はやはり善導大師をちゃんと立てて、立

ててって当たり前の話ですけど、尊敬をされてね、そして善導大師に今申し上げたような、そのどう言ったらいいか、この道筋を立ててくださったのは善導大師だと。

こちら側（『大経』）を顕の義、こちら側（『観経』）は彰隠密だと。本願に救われるということだと。単純な話よ、「善導大師は『観経』だ『観経』だ」と言うでしょう。それはそうや『観経』や。『観経』を註釈している。そうやけどね、良く考えてごらん、本願に救われたところから『観経』を註釈しとんのやからな。そうやね。なんだか『観経』に立って『観経』を註釈してるのだみたいなことを言うのがおりますが、そういうのは仏教がわかってない。つまり救われるのは、いつも言うように如来の本願に救われるんだから。その救われた本願のところから『観経』の大切な意味を、こういう大事な意味があったんだと言って註釈して下さっているのが善導大師だから、当然『観経』の表向きの意味と、それから自分が救われた、隠れているけど本願の意味と、その二つを持っているということは、善導大師自身が『観経』の道筋のように求道をやって、そしてその道筋をひっくり返えされて本願に救われたということがなければ、顕彰隠密なんて言えないはずや。そうやね。言えるということは、善導大師ご自身が『大経』の救いに立って『観経』の大切さを私達に教えて下さるとる。そういうふうには註釈していくのが親鸞聖人の『教行信証』の三心釈です。わかりますね。

それで、読んでいくと難しいんだな。『論註』が終わって、そしてすぐに善導大師の三心釈の引用になっていきますね。215ページ。214ページの引用の最初のところから（西216、島12-59）、まあ時間があまりないんだけど、やっぱ、ちょっとゆっくり読んでみましょうか。皆さんと。考えながら読みなさいよ。いい？「また云わく、」からね。『観経』で、『観経』の三心釈になると、「何等為三」、「何らをか三つとす」というところから始まるのよ。皆さん知っているように、「何らをか三つとするか」とお釈迦様が聞いて、自分で問いを立てて、そしてその問いに対して、「一者至誠心」、「二者深心」、「三者回向発願心」がそろえば、ここにあるように「必生彼国」、「必ず彼の国に生まれるのである」と、こういうふうにお釈迦様がおっしゃってる。こういう意味ですよ。

ですから、『観経』の三心釈になると、「何らをか三つとする」と、お釈迦様が問いを立てて、そして、「一者至誠心」、「二者深心」、「三者回向発願心」と言って、「その三心がそろえば必ず彼の国に生まれる」と言っている。そこは、

「正しく三心を弁定して」、「一者至誠心」、「二者深心」、「三者回向発願心」という三つの心を定めて、「もって正因とすることを明かす」。浄土に生まれる種である、ということを明らかにしている。「すなわちそれ二つあり。一つには、世尊機に随（したが）いて益を顕（あらわ）すこと、意密にして知り難し、」

お釈迦様が、一切の凡夫を救うために、利益を顕すこと、顕彰隠密の顕。そして表向きに一切衆生を救うために『観経』は自力を策励していますけれども、その裏には、「意密にして知り難し」と。お釈迦様の本位は、凡夫である私たちには、なかなか難しいと。

「仏自ら問いて自ら徴（ちょう）したまうにあらずは、解（さと）りを得るに由（よし）なきを明かす」。

しかし、仏が自ら問うて自ら答えたんだから、その教えによって「解りを得るに由なきを明かす」。その教えによる以外に解（さと）りの道はないんだと、いうことを善導大師はおっしゃっている。

「二つに、如来還りて自ら前（さき）の三心の数を答えたまうことを明かす」。

釈迦如来が、自分が救われた道すじを顧みて、さっき上げた、至誠心、深心、回向発願心の三心の数を上げてくださったのである。

『経』に云わく、『観経』に次のように云われている通りである。

**「一者至誠心。」「至」は真なり。「誠」は実なり。一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず真実心の中（うち）に作したまえるを須（もち）いることを明かさんと欲（おも）う」**

これはこの間、親鸞聖人が読み替えていると申しましたね。これは、必ず真実心の中に作したまえるを須（もち）いると。これ須いるというのは、「すべからく何々すべし」という意味ですから、もともとは。だから、すべからく一切の人は真実心をもって努力しなさいと、こういう意味だった。もともとはね。それを親鸞聖人が『大経』に立って、必ず、法蔵菩薩の真実心、それを須いて浄土に生まれなさいと、こう言っとるんだというふう読み替えた。そして、

**「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端（かんさもものはし）にして、悪性侵（や）め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく」と。**

ここも、読み替えたということはこの間言いましたね。ですから今日は、もうその読み替えについては繰り返しません。しかし今読んだように、善導大師もね、「至誠心」と。真面目にやることは大切なんだけど、人間がどれほどやっても、結局は「嘘偽り」だと。「雑毒の善」と言うんだと。そして「また「虚仮の行」と名づく」、嘘偽りの行でしかない。

**「真実の業」と名づけざるなり」。人間がすることは一切真実とは名づけない。**

**「もしかくのごとき安心・起行を作すは、たとい心身を苦励して、日夜十二時、急に走（もと）め急に作して頭燃を灸（はら）うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。」**

一切どれだけ真面目であろうが、どれだけ真剣であろうが、人間がすることはすべて「雑毒の善」と名づく。

**「この雑毒の行を回（めぐら）して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中（うち）に作したまいしに由（よ）ってなり、と。」**

ここ大事やね。私達はなんぼ努力しても、真剣にやっても、「雑毒の善」とは思わんね。やっぱり真面目にやんなあかんのじゃないかという気持ちがあるし、真面目にやったら必ずどこかで報われるやろうと、こう思う。これが普通やね。だから「雑毒の善」とは思わんさ。だけど、善導大師ははっきり「雑毒の善である」、「雑毒だ」とこう言って、「この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり」と、こう言っとる。

その次が大事。「何をもつてのゆえに」、なぜか。その理由は、阿弥陀仏が真実心を尽くしてくださったからである。こうなるとるわけやね。だから、私たちは法蔵菩薩の真実心に触れないと、わからないと、人間の努力を善しとする。人間の努力、人間の自我の執心、それを超えた法蔵菩薩の真実心、仏様の心に触れてなければ、人間の方が雑毒だとは言えない。そこが善導大師の偉いところよ。ねえ。

「何をもつてのゆえに」と言って、「正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中に作したまいしに由ってなり」。

皆さんのいのちの深いところで、この娑婆の欲に汚れないほど深いところで、「いのちの世界に帰って来い」と、法蔵菩薩の真実心が叫んでいる。さっき言ったように、その心は、「我が名を称

えて我が国に帰れ」と言っるとるわけじゃないのやで。いいか。いつかも言うたように、小松に行ったときに、あのおばちゃんが一番前で聞いてって、泣きながら「先生！助けてください！」言うて、「法蔵菩薩の声が聞こえんか！」と言ったら、「聞こえません！」て言うから、「そうか」言うて。聞こえんならしょうがないなあ。「3年頑張った」と言うから、「そうか、5年頑張れ！」言うて。

つまり、法蔵菩薩のいのちの呼びかけというのは、いっぱいいろんなところで、いっぱいいろんな形で出てこうが。子供の時には何か一生懸命頑張って勉強せなあかん、学校行っるとときは。頑張ろうとかいう気持ちとして出てくるぞ。それから、家族持ったら、みんなで仲良くしようとか、ああ、もうけんかして仲良く出来なかった、辛かった。そういう心としていっぱい出てくるぞ。だからその心は娑婆のことで、何とかして解決しよう解決しようとして僕らするぞ。だけど何を持って来ても解決できんぞ。だからお釈迦様が国王であった者を捨てて出家したんやぞ。

つまりそれはどういうことかという、私たちのいのちの底から突き上げてくる気持ちは、娑婆の何物を持って来ても絶対に満足しないということや。そやね。そして、それが、その心が最終的には「法蔵菩薩の願心なのだ」とわかるまで聞法せい」と僕は言っるとるのや。その時初めて、「ああ〜これでよかった」ということになるから。だから善導大師はそこに到達して、法蔵菩薩の真実心に今立っているから、人間のやることなすこと全部「雑毒の善」。「不可である」とはっきり言い切った。ここが善導大師の偉いところよ。救われたところからちゃんと自分の至らないところははっきり切っていく。この辺に善導大師の凄いところがあるわけよ。

そして、「**おおよそ施したまうところ趣求（しゅぐ）をなす、またみな真実なり。**」

法蔵菩薩のなすことは全部真実である。

「**また真実に二種あり。一つには自利真実、二つには利他真実なり。乃至**」

これねえ、なかなか難しいんだ。今言うように、聞法というのは、一生懸命努力して、わかりたいという気持ちがなければ聞法せんね。けどそれは自力ちや自力やな。だから「自利真実」。自力という面と「利他真実」、他力という面と二つあるんだと。聞法するということはね。深いところから言えば他力なのかも知らんけど、そやけどそこまで最初は深くないから一生懸命努力して頑張ってやっすると。だから、聞法というのは、自力と他力とがいつも重なり合いながら聞法を進めているということになる。だから「信巻」（しんのまき）のこの、ここに引用している文章は、全部他力に関わる場所です。

そしてここに「乃至」（ないし）しとろう。乃至ね。これは削って捨てたんじゃないぞ、これは「化身土巻」（けしんどのまき）の自力のところ引用している。

334ページを開けてごらん。こういうことを言い出すと、もう難しくなるからなあ、みな寝るんだ。わしは教養があるために、どうしても言いたくなるなあ（笑）。いやほんとほんと。その辺が親鸞聖人の偉いところだよ。「化身土巻」というのは自力を説いているところやな。それはわかるな。だから「信巻」は他力を説いているところやな。だから善導大師の文章の、聞法というのは、いつも自力と他力が重なりながら聞法するから、だから他力の方は全部真実の「信巻」にまとめとる。そして途中、自力に関わる場所は全部「乃至」している。「乃至」している文章は334ページ、終わりから6行目。ここを読むぞいいか。（西385、島12-167）

「**また云わく、また真実に二種あり。一つには自利真実、二つには利他真実なり。**」

ここまでを「信巻」に引用しとった。そやな、そしてそのあと、「**自利真実**」と言うは」と言うんやから、これは自力の聞法。

「**自利真実**」と言うは、また二種あり。一つには**真実心の中に自他の諸悪および穢国**（えこく）等を制捨（せいしゃ）して**行住坐臥**（ぎょうじゅうざが）に「**一切菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我もまたかくのごとくせん**」と想うなり。」

これわかるやろ、まじめな、要するに自力で頑張ってさあ、ほかの悪やら、この世の娑婆のつまらんことを捨てて、「行住坐臥」と言うんやから、立っっていようと座っっていようと寝っとしても、「一切菩薩の諸悪を制捨するに同じく」、菩薩が一生懸命修行するのと同じように、自分もまた仏教に真面目になろうと、そう想う心である。これ自力やな。本当はさっきのところからこれずっと続いとる文章。ところがこれは自力に関わるとこやから、そこだけ乃至して、乃至しているところは化身土の、今ここに、ここは自力を表わすところやから、ここは自力を表わすところという、これな、ここは真門釈か、うんそう二十願のところや。だから自力を表すところ、ここに引用している。

「一つには・行住坐臥に「**一切菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我もまたかくのごとくせん**」と。つまり、菩薩のように頑張っって聞法しようと思う。

「**二つには真実心の中に、自他・凡聖等の善を勲修す。**」

自分の一生懸命真面目な心の中で、凡聖自他、社会でいいこと、それから凡聖、上から下まで、上品上生から下品下生までのいいことを自分で修めたいと頑張ること。そして、

「**真実心の中の口業**（くごう）に、」口に、「**かの阿弥陀仏および依正二報を讃嘆す。**」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」を称えて浄土に生まれたいと想うこと。

「**また真実心の中の口業に、三界六道等の自他依正の二報の苦悪の事を毘厭**（きえん）す。」

悪いことをやめて、念仏一つで頑張っっていこうと、こう想う。

「**また一切衆生の三業所為の善を讃嘆す。もし善業にあらずは、敬**（つつし）んでこれを遠ざかれ、**また随喜せざれとなり。また真実心の中の身業に、**」云々。

ここは身・口・意業にわたって、念仏一つを称えて、浄土に生れたいと一生懸命努力して聞法していくということ。これが二十願の機ですね。だからこういう自力に関わるところは、ここは乃至して、善導大師の文章を乃至してね、そして乃至して捨てたんじゃない、捨てたんじゃない、自力を表わす化身土の方の巻に引用している。その辺が親鸞聖人の見事なところですよ。いいですか。だから、乃至して捨てたんじゃないぞ、捨てたんじゃない、自力のところ、化身土の方に引用している。ここは全部そうなっているから。それをいちいちやると、面白いけど皆さん寝るから(笑)。ね、今一つだけ言うたけど、それでわかろう。そういうふうになつとるということを知っておいてください。

それで元に帰りましょう。（東聖典215頁、西217、島12-59）

そして今の自力のところ、本当はこう乃至しているところ、長〜いのやぞ。長〜いところを「化身土巻」に引用して、またぽつと真実のところから引っ付けとる。

「**不善の三業は、必ず真実心の中**（うち）に**捨てたまえるを須**（もち）いよ。」

ここも読み替えですが、まあこのままいきましょう。人間のする身・口・意の三業は、不誠実だから、法蔵菩薩の真実心の心を須いましょう。

「**またもし善の三業を起こさば、必ず真実心の中**（うち）に**作**（な）**したまいしを須**（もち）いて、**内外・明闇を簡**（えら）**ばず、みな真実を須**（もち）**いるがゆえに、**」

もし、善の心を起こしたとしても、それは法蔵菩薩の真実の心を須いましょう。不善の三業であろうが、善の三業であろうが、人間のすることは「虚仮の行」だから、「雑毒の善」だから、必ず法

蔵菩薩の真実心の中に作したまいしを須いて、内外・明闇を簡ばず、みな真実を須いるがゆえに、「**「至誠心」と名づく。**」と。

『観経』で「至誠心」というのは、実は、「法蔵菩薩の真実心に目覚めなさい」と、こういうことですよと。そして、自力でやることは、ろくなことじゃないということで、はっきり目覚めてね、法蔵菩薩の真実心に立ちなさいと。これが『観経』の「至誠心」の説法なのです。というのが善導大師の解説です。すばらしいと思いませんか。そこに「至誠心」は『大経』の至心に目覚めよ」と、こう言っとるんだと。ここには出てきませんが、案にそう言ってるから、だから、至心・信楽・欲生の三心を訪ねるときには、善導大師のこの聞法の「至誠心・深心・回向発願心」ということが助走になる。これがなければ観念になる。そういう形になっているということです。わかりますね。

今申しあげましたように、この至誠心のところで、実は「機の深信」と「法の深信」がほぼ押さえられている。そうやね。ですからこの至誠心の今申しあげたことが実は深信のところの「二種深信」として結実していくこととなります。ですからすぐに、次、今日はこっからさ。

**「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫（こうごう）より已来（このかた）、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。」**

これが、人間の身・口・業の所修は「雑毒の善」であり、「虚仮の行」であるということの終着点、これが「機の深信」。いいですね。そして、さっき言った、だからこそ法蔵菩薩が立ち上がってくださったんだというふうに、法蔵菩薩のところに立ち位置を変えていく、それが「法の深信」です。

「**かの阿弥陀仏の四十八願は…**」、**「かの」**っていうのは『大経』の四十八願ですよ。『大経』に説かれた四十八願は、衆生を摂め取って、疑いなく、躊躇することなく、本願力によって決定的に浄土に往生していくのであると信ずる」。これが「法の深信」ですね。ここに、先ほどみなさんと一緒に読んだ至誠心釈で語って来ていた内容が「二種深信」として決定（けつじょう）している。決定（けつてい）している。

ですから至誠心釈と深心釈とは一つになつとる。わかるね。何言ってるかわかる？ 今度皆さんと一緒に勉強していくときにわかるけど、「三一問答」の至心釈と信楽釈を親鸞は一つにしとる。そうやね。なぜなら、善導大師の今のところをどう見ても至誠心の内容が二種深信として決定しとるんだから、だからここはひとまとめに、どうしても読まないといけない。そうなってるから親鸞聖人はこの「三一問答」で、またこれから勉強していくけど、本願の本願成就文を二つに分けて、こちら側（至誠心・深心⇒至心・信楽）は、「本願の信心の成就の文」とこういう題を付ける。こちら側（回向発願心⇒欲生）は「本願の欲生心の成就の文」と、こういう題を付けて、これをひとまとめ、これをひとまとめとして二つに本願成就文を分けて了解する。それは善導大師のものを読むとそうなつとるから、善導大師に教えられた。これいいね。質問ないね、間違いなかるう。勝手にあんなことして切ったんじゃないんだ。まっ、今のところはそこまで言うときます。いいですね。

ですから、ここでどう読んでも至誠心釈の内容が「二種深信」として決定してる。決定してる。そしてこの後ね、ややこしいんだ。

**「また決定して深く、「釈迦仏、この『観経』に三福・九品・定散二善を説きて、かの仏の依正二報を証讚して、人をして欣慕（ごんぼ）せしむ」と信ず。」**

『観経』を説いてね、これなかなかいいでしょ。これ皆さん聞法の最初はそうやんか、さっき言



うたように。仏様は西の方におるとしか思えんから、そして浄土っていう国があるんなら、この娑婆はしんどいなあ、もうこんな嫌なことばかり起こる。浄土に生まれたいとこう、浄土を憧れさせる。それが『観経』の役目だと。そして、その次に、

**「また決定して、『弥陀経』の中に、十方恒沙の諸仏、一切凡夫を証勸して決定して生まるることを得」と深信するなり。」**

つまり、『阿弥陀経』は、お釈迦様が一人で浄土を勧めてるんじゃないで、『阿弥陀経』を読んだらわかろうが、あの、六方段のところに出てこうが、**「恒河沙數諸仏、各於其國、出廣長舌相、徧覆三千大千世界、說誠實言。汝等衆生、當信是稱讚 不可思議功德 一切諸佛 所護念經。」**(『阿弥陀経』)、ずうっと阿弥陀さんの舌の中から諸仏がいっぱい生まれて来て、ね、この世界中の仏は、実は阿弥陀さんを褒めとるのやというふうにかかれとる。だから、阿弥陀の覚りが根源仏。なぜかと言うと、今まで何度も言うたね、菩薩も救うし、凡夫も救う。そんな仏様は阿弥陀さんしかおらのやから。だから、お釈迦さんは『観経』で念仏一つを勧めて、「浄土を憧れなさい」と言うけれど、それはお釈迦さん一人の説じゃないんだと。諸仏が全部勧めとると。だから、念仏一つ、どの宗派でも「念仏称えなさい」と。こうなるんだということが『弥陀経』に説かれていると。だから、『阿弥陀経』の中に「十方恒沙の諸仏」、ガンジス川の砂の数のほどの諸仏たちが、「一切の凡夫を証勸して」、そして、「証勸して」というのは、勧めて。「決定して、浄土に生まれなさい」と。「浄土に生まれるということが救いなんやぞ」ということを深信する。

いいか。そろそろ寝始めたやろ(笑)。また寝始めたらアホなこと言わなあかんやんか(笑)。寝たら先生にご迷惑かかんねん。進まへん。さっき言うたように、浄土に生まれたらいいなあと、まずは思うさ。欲しいものはみな手に入る。空から降ってくるらしいぞ。ルイヴィトンやらグッチやら。ええ、ジャガーやらフェラーリが降ってくるで。そんないいとこやったら憧れて行きたいと、こう思うと。これは十九願。『観経』やね。

けど、そこに決定的な選びがあつてね、やっぱり、フェラーリ乗ってて、一生乗って浄土に行かれへんからね。だから、これは、私たちの求める心は娑婆のモノを求めてるんじゃないと。どんなモノを持ってきても納得せんやというふうで育てられて、そして「ただ念仏して弥陀に助けられなさい」という教えに遇うとるわけやね。それによって、そうかと、今までこの心は娑婆のモノば一っかりにちらちらいつとったけど、わかった、これ浄土を求めとるんやと。本当の意味で自由になりたいと言つとるんやと。本当の意味で平等になりたいと言つとるんやと。浄土しかない。そうやと言つて初めて南無阿弥陀仏一つに立ち帰るんだと。そのときに南無阿弥陀仏という教えはお釈迦さんの『観経』に説いてるだけじゃなくて、諸仏、この仏教界のすべての仏様が念仏を勧めとるんやと、それが『阿弥陀経』で説かれていることやというふうで説かれていくわけです。

よう分かるやろ。こちらから言えば娑婆のモノを求めとった十九願の求める心が、今度は「念仏一つで助かる」というふうで純化されていく。求道心がね。というふうでここは、『観経』、『阿弥陀経』とあつて、そしてその次に、ここはまた大事なんだな。

**「また深信する者、仰ぎ願わくは、一切行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、」**

一生懸命、もう娑婆のことはいいと、仏様の教えしかない、と、こう決めて、仏語を信じて、自分の身命を顧みない。

**「決定して行に依って」、**決定的に南無阿弥陀仏一つによって、

**「仏の捨てしめたまうをばすなわち捨て」、**仏は八万四千の法門を説いたけど、一切衆生を、凡

夫を救うために最後まで残ったのが南無阿弥陀仏一つ。だから後の行はいっぱい説いとる。けどそれは捨てたんだと。だから、仏がお捨てになったものは捨てる。阿弥陀仏が行じなさいと言った南無阿弥陀仏の行一つを取る。

「**仏の去(す)てしめたまう処(ところ)をばすなわち去(す)つ。これを「仏教に随順し、仏意に随順す」と名づく**」と。

わかるね。仏教は一つだと、こう決めて、「仏意」というのは、一切衆生を救うためには南無阿弥陀仏一つしか説いてない。その仏意に従うんだと。ところが、ここまではお釈迦さんやね、仏教、仏意、こりゃ「仏」っていうのはお釈迦さんのことや。ね。ところが、その後、これを「仏願に随順す」というふうに、南無阿弥陀仏一つこそ阿弥陀の本願なんだという『大経』のところに移っていきます。そして、そういう人を「真の仏弟子」と名付くと。こういうふうに善導大師がおっしゃるわけです。これなかなか偉いねんぞ。うーん、まあしゃあないな。感動せい、もうちょっと。

ここは、はっきり申し上げましょう。もう時間がないので、ここを一生懸命読むと、難しい。ところが、ここは、実は宗祖にとってものすごく大事やったかな。なぜかと言うと、ここの文章、こっからずーっと長いこと、欲生心に至るまで、218ページの「三者回向発願心」とあって乃至とあるね、ここまでの長ーい間、この文章は本当は長いんです。そして、この文章も乃至しているところがある。乃至しているところは「化身土巻」に回してるから。この文章は長いんだけど、要を取って言います。この文章は実は、親鸞聖人が『愚禿鈔』にまとめとるんだ。440ページ(西522、島14-19～)。

「七深信」、「六決定」と言ってね、親鸞聖人が『愚禿鈔』に、ここはずーっと長いことかかってまとめとるんです。440ページ開けた？ ちょっと読んでみるぞ。

「**第一の深信は**」、これ機の深信のことやぞ。ね、二種深信で言えば機の深信のこと。「**第一の深信は「決定して自身を深信する**」。「初めて信じるに足る自分に遇うた」ということやと。人間が自分のことを思うと、どうしてもええように思いたいやろ。だから失敗した自分は認めたくない。弁解ばかりする。どうしても「良い自分、良い自分」と言って、良い自分ばかり求めて、そして結局は虚しく終わる。ところが初めて信用に足る自分に遇うた。それは、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫である」ということ。そしてその身は今始まったわけじゃなくて、人類始まって以来、曠劫より已来(このかた)、自力によって常に迷ってきた。そして未来永劫に渡って、救いの縁がある者ではないとはっきりした。その自分こそ、実は自己自身であると。初めて信頼する自分に遇えた。これが機の深信という意味だと親鸞聖人がここで押さえているわけです。申し上げていることわかりますね。

そして、「**第二の深信は「決定してかの願力に乗じて深信する**」。決定的に本願力に乗って、そして、必ずこの願力によって浄土に生まれる。「**すなわちこれ利他の信海なり**」と言うんですから、本願に立ったときに初めて本願の世界に目を開いて、この世を超えた世界があると。そして必ず本願力によって浄土に生まれるんだということを信じる。それが法の深信の意味だと。ここでまとめてる。いいね。

そしてその後、さっき言った、僕が少しだけ読みました『**観経**』を深信す」。第三決定、深信。第四に『**弥陀経**』を深信す」。『観経』、『弥陀経』、そしてこの第五に「**ただ仏語を信じ決定して行に依る**」。お釈迦様の教えを信じて、決定的に南無阿弥陀仏という行に依るんだということが第五番目。第六番目は、「**この経に依って深信す**」。この後ずっとそれについて説明していつているから、

今はちょっとそのまま言うよ、そして「**第七には「また深心の深信は決定して自心を建立せよ」と。**」というふうに、これよくわからない(笑)。これわからないけど、長〜い、さっきの善導大師の文章の大事なところだけを取ってここにまとめる。ね。だから、これは実に大切なところなんです。

わからないと言ったのは、わからんことないよ、これ元の文章に返って一生懸命説明し出すと、ああそういうことかと少しずつわかってくるよ。けど、今ここにはないからわかりにくいね。ただ、親鸞聖人は二種深信で終わらないで、善導大師の長い文章を第三深信、第四深信、第五深信、第六深信、第七深信と言って、この第七深信はまた二種深信に返っていくのよ。

「**また深心の深信は決定して自身を建立せよ**」と言うんですから、機の深信に返っていくわけよ。ぐるーっと回ってね。これなんやと思いますか。曾我量深という人はね、立派な人でね、ここをこう説明している。「機から法を開く」と。そうやね。求道というのは、言葉を変えると求道というのは、求道の苦勞から初めて法に到達するんですよ。よく法の方から説明する人がおろうが。これはよう言われる。悪く言うわけじゃないぞ。悪く言うわけじゃないけど、例えばお東の方は機の求道を言うと。ところがお西の方は先に法の方を言って、阿弥陀さんがこうやって手立てしとんのやから、だから救われるに決まっとるやないかと言って、法の方を先に持ち出す。それは違うと書いてる。機の苦勞によって、初めて法を開くのであって、だから善導大師はそう書いてるから。ね。

だから、たったそのこと一つにしてもそういうことになります。第一深信を、だから機の深信を第一深信という。人間の求道、そして自力無効ということを通さなければ本当の法には出遇えませんよ。もし、それを抜きにして法というなら、それは観念論になります。単なる学問になる。それはまあ耳年増(みみどしま)みたいなもんで、救いにならん。そういうことを、ここちやんと言っとることになる。

そして、曾我さんは「機から法を開く」と。そして、開いた法に機を包むんだと。こう言うんですね。確かにそうなっとるわな。機から法を開いて、法の深信を開いて、法の深信のところは今度は自分の歩みである『観経』、『阿弥陀経』、ずっと自分の歩みが機を包んどる。そうなっとるね。けど、みんなそれを言うて、わかったつもりになっとる。これ誰かわかる人おらんか。もうこれわかったらハワイ旅行やな。これよう見てごらん。曾我さんのように、「機が法を開く」。「開いた法に機を包む」。その通りや。その通りやけど、これよう見てごらん。『観経』は十九願やぞ。『阿弥陀経』は二十願やな。そして十八願にいくのやぞ。「三願転入」やろ。これは、はっきり言いましょ。善導大師の「三願転入」が説かれているところです。誰も言っていないけど間違いない。だつてそうなっとる。「三願転入」は、皆さんと一緒に勉強した『大経』で言うと、「智慧段」のお釈迦様の説法やね。「智慧段」でお釈迦様が弥勒に「浄土を見てきたか」、弥勒と阿難に「浄土を見てきたか」言うたら、「見てきました」。「浄土に「胎生」いうのがあったけど見てきたか」言うたら、「はい見てきました」。こう言うわね。そしたら弥勒が、弥勒というのは次に仏になる人やから、わかっとるはずの弥勒が、弥勒でもわからん。弥勒は遠い。「何であんな広い浄土に「胎生」いう小さい国があるんですか」と理由を問う。そうするとお釈迦様が、「十九願の自力と二十願の自力、これが「胎生」を作るんだ」と。「十八願の他力、これが絶対的な大きな世界を開くんだと説法しとるね。『大経』の「智慧段」にちゃんと説法しとる。あれが「三願転入」のもとになってます。しかし、親鸞聖人が「三願転入」を言う前に、善導大師がちゃんと十九願、二十願、十八願と並べとろうが。これは、救われた善導大師が『大経』に立って、お釈迦様のあの説法に立ちながら、自分を振り返って、「自分はこういう求道の中で初めて『大経』の大きな十八願の世界に目を開いたんで

す」というふうに、長々と『観経』の説明をしながら説いているところがここになります。だから親鸞聖人は、『大経』のあの「智慧段」のお釈迦様の説法と、善導大師のこの文章によって、「三願転入」を表明することになります。間違いない。文句あったら言うてこい（笑）。命がけで間違いない。親鸞聖人のところに携帯で電話してごらん。「075のシンラン、シンラン」て。そやそやって言うから。そうなっとうが。僕は自分の意見言っとるんやない。そうなっとうだけのこと。だからそういう意味で、あの第二深信から後の長〜い善導大師の文章は、「親鸞聖人にとっては決定的な意味を持つ文章」です。しかしそこは私たちがいちいち読んでいくと、ものすごく難しく、もうわけわからんようになるから、だから、『愚禿鈔』を見るとこうなっとうでしよう。そういう意味で、善導大師が実は『大経』に立って、「三願転入」を先に述べてくださっとうんだと。こう言うてる。それによって親鸞聖人は、『大経』と善導大師によって、「三願転入」を展開することになっていきます。間違いないと思います。ちょっと休憩しましょう。

## 講義 2

南無阿弥陀仏。えーそれでは、もうしばらくお話をさせていただきます。えー、はしよってね、まあわかることをね、みなさんがおわかり頂けるところだけを申し上げておりますが、この、善導大師、ただ者じゃないですよ。あの、たいがいの人にはねえ、「善導大師は『観経』だ『観経』だ」と言うてね、確かに『観経』を註釈してますよ。しかしねえ、註釈している立場は何度も言うように『大経』に立っているわけですよ。ですから『観経』の註釈をしながら、背景に『大経』を思うて講義をしますからね、あれはやっぱり天才なんです。そして今のところは、文章を読むと、なかなか難解な文章なんです。長〜い文章ですから、一回原文、もし志がある人は原文見てごらん。長〜いから。その中で親鸞聖人は、「二種深信」（にしゅじんしん）を引き、そして第三深信、第四深信というふうに付けていってね、そして『愚禿鈔』でまとめているわけです。

で、機の深信から始まって、また機の深信にぐるっと回って帰っていくんだけど、法から見た自分の求道の足跡は、まず『観経』に立っただと云ってるわけです。そりゃそうです、誰でも仏様を外に見るから。『観経』は本願を説いてませんよ。西の方に仏さん居ると説いてるから。だから西の方に居ると誰でも思う。自分の外に、ね。仏さんは外から自分を救うんだとしか思えんから。そっから私達の求道は始まっていくわけです。

暁烏敏（あけがらすはや）という人がね、前にも何べんも言ったことあるけど。「俺はずっと若い時から説法の名手だと言われて、『観経』に立って、西の方に仏さんが居ると。西の方の仏さんに救われるんじゃ言うて、わしゃあずっと説法してきた」と。ところが、あの一、いろんな事件を起こしてね、今のあの松本人志の様な事件があって（笑）。えー、ちょっと違うけどね、けどまあ似たようなもんだ。それで「暁烏敏は色魔じゃ」言うて、あの、あれに、「中外日報」に書かれるし、そやってみんなが逃げて行く。友達が居らんようになってしもうて、そして最後には、大地に身を投げ出して叫ぶんだ。「神も仏も有るものか！」言うて。「西の方に仏さんは居ると思っただけど、そんな仏さんは居らん！」言うて、「神も仏も有るものか！神や仏に救われたら、救われた仏さんに縛られる！」と。大地に投げ出して、「わーっ」と泣きながら大地を叩いてたら、「命の方

から、法蔵菩薩が名乗り出た」と。だから、「敏（はや）は大地の意義であります！」と言って、あ一清沢（清沢満之）さんに、もう亡くなつとるけど、清沢さんに手紙を書くんだね。

そのように、みんな出発点は『観経』から出発する。何故かと言うと、対照的に仏さんを説いてるし、西の方に仏さんを説いてる。娑婆（しゃば）と浄土、凡夫と如来、浄土と娑婆というふうに全部『観経』は相対的に、私たちの頭に合うように説いてる。だからそれに立って求道するんだけど、「そんな仏さんは居らんのだ！」と言って念仏一つに帰依していく。最後には自分の求道心、「大地から湧き上がったこの求道心こそ法蔵菩薩だったんだ」と言うところにまで到達して、第十八願の成就が完成していく。その求道の跡を、善導大師は『大経』に従って、『観経』・『阿弥陀経』と経典を出してるけど、これ、願文に従えば、十九願・二十願・十八願になつとるでしょう。ですからこれは、善導大師が初めて自分の求道の跡をね、きち一つ『観経』を註釈しながらまとめていった文章なんですね。

それを親鸞聖人が、『愚禿鈔』でこんなふうに合わせて、大変大事な文章として読むのは、これによって親鸞聖人もよくわかったわけです。自分の求道の跡が。比叡山で一生懸命修行して仏さんを求めていた。十九願やった。ところが降りて来てね、そして、定善から散善に展開して、「廃悪修善」、「一者至誠心、二者深心」、この教えに従って、やがて念仏一つ、『阿弥陀経』に目覚め、そして十八願に救われて行ったんだという道筋が、ここに説かれているために、親鸞聖人はこの文章をまとめて『愚禿鈔』にこう書いてると。そしてこれはねえ、今言ったように親鸞聖人が「三願転入」を説いていく時の立脚地になりました。だからここにある『大経』の「智慧段」の教説と、善導大師の今の教説と、これが親鸞聖人の「三願転入」の立脚地だというふうに考えていいと思います。

それで、次は、今度は「回向発願心」。これになっていきます。218ページのところね。この第一行目のところに、「**かるがゆえに「深心」と名づく。**」（西221、島12-61）と、こう言って「一者至誠心」、「二者深心」が終わるね。そうすると三つ目に「**三者回向発願心**」、『観経』の回向発願心。直ぐにそこに乃至されてますね。ここはさっきと同じように「化身土巻」に、回向発願心でも自分で努力してというか、自分で浄土に生まれたいちゅう気持ちが無いわけじゃないわね、みんな。そっちの方は「化身土巻」に回してる。そしてこっちは、

**「また回向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須（もち）いて得生の想（おもい）を作（な）せ」。**

わかりますね。本願力によって浄土に生まれて、浄土に生まれたという感動をもちなさい。

**「この心（しん）深信せること、金剛のごとくなるに由（よ）りて、**

ここ大事よ。金剛心というのは善導大師の言葉だと知つといてね。信心を金剛心と言った。金剛心と言ったら今の言葉で言うとダイヤモンドのような心と、こういう意味よ。絶対に壊れないダイヤモンドのような心に由って、ここから大事だけど、

**「一切の異見・異学・別解（べつげ）・別行の人等のために、動乱破壊（どうらんはえ）せられず。」**これ、わかりますね。すべての見解が違う、あるいは学びが違う、そして理解が違う、行が違う。そういう人達のために迷わない。「動乱破壊せられず」。これは広一く言えば、世間の価値観に私たちは動乱されますね。そういうものにも迷わされない、もうちよつと言うと、これは、異見・異学・別解・別行というのは、浄土教以外の仏教、聖道門の人たちに決して破られない。

**「ただこれ決定して一心に捉（と）って正直に進みて、かの人の語を聞くことを得ざれ」。**

一心に浄土に進んで、聖道門の人たちに耳を貸すことは無い。

「すなわち進退の心（しん）ありて、怯弱（こうにやく）を生じて回顧（えこ）すれば、道（どう）に落ちてすなわち往生の大益（だいやく）を失するなり。」

そういう異見に惑わされると、浄土に生まれるということを失ってしまう。

「問いて曰（い）わく、もし解行不同の邪雜（じゃぞう）の人等ありて、来りて相惑乱して、あるいは種種の疑難を説きて「往生を得じ」、往生なんか得ることは無い。

「と道（い）い、あるいは云わん、「汝等（なんだち）衆生、曠劫より已来（このかた）、および今生の身・口・意業に、一切凡聖の身（しん）の上において、つぶさに十悪・五逆・四重・謗法（ほうぼう）・闡提（せんたい）・破戒・破見等の罪を造りて、未だ除尽（じょじん）することあたわず。しかるにこれらの罪は、三界悪道に繫属（けぞく）す。いかんぞ一生の修福念仏をして、すなわちかの無漏無生の国に入りて、永く不退の位を証悟（しょうご）することを得んや。」

なかなか立派でしょ。聖道門の人たちは、「お前たちは凡夫だ」と。「第十八願に五逆・誹謗正法を除くと書いとるじゃないか」と。「お前たちの身は五逆・誹謗正法どころか、十悪・五悪の身や」と。「そんな者が往生することがあるのかね！」と。こういうふう議論を吹っ掛けると。

「答えて曰（い）わく、諸仏の教行数塵沙（じんじゃ）に越えたり、識（さと）りてを稟（う）くる機縁、情に随（したが）いて一にあらす。たとえば世間の人、眼に見るべく信ずべきがごときは、明（みょう）のよく闇（あん）を破し、空のよく有（う）を含み、地のよく載養（さいよう）し、水のよく生潤（しょうにん）し、火のよく成壞（じょうえ）するがごとし。これらのごときの事、ことごとく「待対（じたい）の法」（※質疑応答参照）と名づく。すなわち目に見つべし。千差万別なり。いかにいわんや仏法不思議の力、あに種種の益無からんや。随（したが）いて一門を出ずるは、すなわち一煩惱の門を出ずるなり。随いて一門に入るは、すなわち一解脱智慧の門に入るなり。これを為（も）つて縁に随いて行を起こして、おのおの解脱を求めよ。汝何をもってか、いまし有縁の要行にあらざるをもって、我を障惑（しょうわく）する。しかるに我が所愛は、すなわちこれ我が有縁の行なり、すなわち汝が所求（しよぐ）にあらす。汝が所愛は、すなわちこれ汝が有縁の行なり、また我が所求にあらす。このゆえにおのおの所樂（しよぎょう）に随いてその行を修（しゆ）するは、必ず疾（と）く解脱を得るなり。行者当（まさ）に知るべし、もし解（げ）を学ばんと欲（おも）わば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切碍（さわ）りなし、みな学ぶことを得るとなり。もし行を学ばんと欲わば、必ず有縁の法に藉（よ）れ、少しき功勞（くろう）を用いるに多く益（やく）を得ればなりと。」

ここまでにしときましようか。

先程のように、聖道門の連中は、「お前たちは五悪・十悪を犯した凡夫じゃないか」と。「そんな者がなぜ救われるか」と。こういう議論を吹っ掛けると。そういう議論を吹っ掛けられた時には、仏教は、これかなり、善導大師は、この一、何て言うかな、えー、その意見を受けてね、否定しないで、「仏教は沢山の法があるんだ」と、ね。だから、それぞれの機縁に応じて八万四千の法があるんだからね。だから、それぞれの出来が良い人も居ろうが、この中に。わしみたいに出来が悪い奴も居るけど、出来が良い人は良い人で、わかり方が違うんだやっぱ。法然のように、あー、あれ、出来が良すぎたんだなあ。あーものすごく勉強したんだ。40まで勉強したんだぞ。そして、勉強の中でわかったんや。あの人、人に遇うてないからね。善導大師の書いた物を読んでわかったわけや。と言うことは、書いた物を読んで、その人が見えたわけよ。生きた善導大師に遇うたわけよ。それだけ文章を読む力があつたっちゅうことや。

わしら直ぐ寝ろが、こうやって（笑）。ね。そやけどあれ読んでさあ、生きた善導大師に遇うたわけよ。だからものすごい学力があったちゅうことや。だからものすごい学力がある人は、そういう学力の方法でも仏教に遇える。ところが、あーさっきのような長いとこ読むと、ほぼ半分寝てしまう。そういう人はしょうがないから南無阿弥陀仏を称えろと言つとると（笑）いうふうに、この上品上生から下品下生まで、菩薩の法に合う人は菩薩の法を頑張ったらいいんだと。八万四千あるんだから、それぞれのところで「縁に藉（よ）れ」と。まずこう言ってるね。

その次に大事なのはね、これね、えー、「**行者当に知るべし**」。219ページの2行目ね（西222～、島12-62）。それだけ言っという、「**必ず疾く解脱を得るなり**」と。だから、それぞれの、ね、機縁に応じて行をすれば、必ず解脱を得ますよと。そう言っという、その次に「**行者当に知るべし**」。行者と言うのはわかるね。仏教の実践や。これは、龍樹の『十住毘婆沙論』もそうやで。

「大乘を行ずる者は、三千大千世界を挙ぐるよりも重し」。あそこから、「大乘を行ずる者は」、つまり実践行です。実践行ちゅうのは、自分が救われるかどうかちゅうことや。そやね。そのために実践するんやから。だからあ、七祖の方たちは、観念論の学問論を嫌いました。実践論ね。だから善導大師はこっから実践行です。「**行者当に知るべし**」。本当にこの身全体が救われたいと思う人はよく聞きなさいと。「**もし解を学ばんと欲わば**」、もし理解したいと言うんならば、凡夫から聖人に至るまで、あるいは、「**乃至仏果まで、一切碍なし、みな学ぶことを得るとなり**」。

もし理解したいと言うんならね、頭が良い人は一生懸命勉強しなさいと。なーんぼでも勉強することができる。仏果とは、仏の識（さと）とは、こういう空ですとか、ね、一如ですとか、大涅槃ですとか、その内容はこうですといっぱい書いとるから。それ、解を理解したいと言うんならば、それを学びなさいと。一切碍がなく学ぶことはできますよと。しかし、「**もし行を学ばんと欲わば**」、もし本が一にこの身全体が救われたい、その実践行を学びたいと思う人は、「**必ず有縁の法に藉（よ）れ**」、縁のある法に藉（よ）りなさい。これねえ、これ有縁の法と言うのはね……ん、ん、広く言えば縁がある仏教を学びなさい。しかし、もうちょっと「有縁の法」、「この身に合った教え」ということですよね。「この身に合った教えを学びなさい」と言うことですから、そういう意味では、「機教相応」、「凡夫に合う教え」、「**有縁の法に藉れ、少しき功勞を用いるに多く益を得ればなりと**」。ここまで大事ですね。申し上げたいことわかるでしょ。（※質疑応答参照）「有縁の法」、善導大師が「有縁の法」と言うのはね、「時機相応」、「機教相応」、機は凡夫。いいですか。「機」は凡夫。「教」は仏法。「相応」、機と時代。機は凡夫、時代は末法。その時に藉（よ）るべき教えは、「本願の教え」しかありません。

どこやったっけなあ。うーん。道綽禪師がねえ、中国で浄土教を独立させる、思想的にはね。聖道門から浄土教を独立させるね。その時に『大集月蔵経』を引くでしょう。どこやったっけなあ、こういうのがちょっと歳いって来たんやなあ……ええっとなあ、

338ページ、終わりから1.2.3.4.5.6行目にね（西391、島12-171）、「**『安楽集』に云（い）わく**」、道綽がこう言ってるでしょうと。『安楽集』にね、338ページ、終わりから6行目です。終わりからですよ。その通り読みますよ。いいですね。

「**『安楽集』に云わく、『大集経』（だいじつきょう）の「月蔵分」（がつぞうぶん）を引きて言（のたま）わく**」、『大集経』ってのはこれ、お釈迦さまの経典だからね。当然の話。だから、道綽の「意見、じゃないよ。そうじゃなくて、お釈迦様がこう言ってるでしょと、こう言ってる。お釈迦様の『大集経』に「**我が末法の時の中に憶億（おくおく）の衆生、行を起こし道（どう）を修せんに、未だ一人**

(いちにん) **も得る者あらじ、と**」。わかりますね。末法の中で、「**憶億の衆生**」、全部の衆生が、例えば菩薩の行を起して、菩薩道を修めようとしても、さとりを得るものは一人もおらん。「**当今は末法なり**」。今は末法である。「**この五濁悪世には、ただ浄土の一門ありて通入すべき路(みち)なり、と**。」とお釈迦様が『大集月蔵経』という経典の中に言ってるでしょうと。これ道綽の意見ではない。

「**また云わく、未だ一万劫を満たざる已来(このかた)は、恒(つね)に未だ火宅を勉(まぬか)れず、顛倒墜墮(てんどうついで)するがゆえに。おのおの用功(ゆうこう)は至りて重く、獲る報は偽なり、と**」。

わかりますね。要するに、一切の人がどんだけ頑張っても逆さまなことをしとるんだと。だからついに火宅を出ることはできない。本願の名号に依るしか道はもう無いんだということが『大集月蔵経』という経典に出てるでしょうと。これを元にしながら道綽が中国で聖道門の仏教と浄土の仏教を分けて、そして「**道綽決聖道難証 唯明浄土可通入**」(「正信偈」)ということを表示した。これは大変なことよ。法然と同じように命懸けよね。だけど、今言ったように道綽の意見じゃなくてお釈迦様がそう言ってるでしょうと。

私たちは、人間は素晴らしいと思うとるけどね、いつも私が言うように、1歳から4歳くらいまでは自我が生まれてないから仏さまの世界を生かされとった。そうやね。ところが4歳くらいになって言葉によって生まれた自我が自分自身だと思ひ込んで、全部仏さまの世界を自分の世界に変えてしもうた。今も仏さまの世界に生きとるから、誰が先に死ぬかわからんし、どんな事故が起こるかわからん。けど、俺の思い通りにならん言うて泣く。それは、人間が人間になった時に仏さまの世界を忘れたからや。だから「顛倒(てんどう)」、やと言つとる道綽は。人間がなんぼ良心や善心や立派な心を持って一生懸命やったとしても、そんなものは逆さまやと決まつとるやないかと言つとる。そんなことで仏教が実現するんなら、浄土教なんかいるかと本願なんかいるかと言つとるわけです。逆さまの自分を本物やと勘違いして、そして良心じゃ何じゃ立派な心じゃ言うて、菩提心じゃ、わけのわからんこと言うて、そして自分で行を立てて修行する。それは「顛倒の善果」である。私が言ってるじゃなくて、お釈迦様がそう説いてるんだと。だから末法になったら、如来、いのちの方から呼びかけてくる、そういう呼びかけに耳を傾けて、それが何かを探っていく以外に仏の覺りに到達する道はないんだとお釈迦様が言つとるだろうかと、こう言つとるわけです。まあ私のような品が悪くありませんけども(笑)、道綽はそうおっしゃってるわけですね。

そして、道綽が中国で聖道門から独立、思想的には独立を果たす。それを引き継いだ善導大師が今度は『観経疏』を書いて、念仏一つを立てて、『観経』の教学を確立していく。中国でね、そういう意味で浄土教の教学も本当は完成してるんだけど、現実体として聖道門から独立していなかった為に、法然が日本で敢えてその仕事を引き受けて、命懸けで日本で浄土教を独立させた。聖道門から独立させた。それはひとえに、ね、今言うように、一切の人が救われる道は、末法になれば浄土門しかないから、それに命を捨てたんであって、自分の私利私欲の為とか、自分の名声の為とか、そんな気持ちは法然には微塵もなかった。一切の人が救われる。それは、いいかね、みなさん一人ひとりの、僕はちょっと言い過ぎやからね、ちょっと説明し過ぎとるんだ、本当は。説明したらあかんのや、本当はな。そやけどわかるように言わなしゃあないから。な。このお、いのちの深あいところから呼びかけてきているその意味を知ることだけが仏法に通入する道ですよ。こういう教えはね、これは、それこそ上は菩薩から下は凡夫まで、みんないのちからの呼びかけは誰にもあろう



が。だからそういう仏教を、そういう教えにまで根源化していったお釈迦様、法蔵菩薩。すごい。

だって、人が一人残ったたら必ずそこに実現する仏教。そやね。だから末法になろうと滅法になろうと、人間がおる以上、本願の教えを聞けと。だから『大経』だけは、末法になろうが滅法になろうが残るとお釈迦様は説いとる。それは、人が一人おっても、一人おればそこにいのちからの呼びかけがあるからや。で、それが実は仏法に通入する道だというふうに、そういうことを手がかりにして仏法を説いたのは『大経』しかない。すごいことよ。だから、お釈迦様の方が苦勞しとるし、阿弥陀さんの方が苦勞しとる。私たちは何も苦勞しなくてもその声を聞く、それによって仏法に通入すべき道である。と、道綽が言ったわけや。

自我が生まれて人間になって、は？人間って万物の靈長じゃ言うて、そのうち潰れるぞこれ。もう南極の水は溶けるわ、えー、無茶苦茶になって核で、あの、ロシアのなんじゃあの、プーチンか。プーチンとあの、キム・ジョンウンな、それからアメリカもおかしい。もう、みんなおかしかろうが。あれ全部だめ。だからもうこれ多分、仏教者を育てるしかないぞ救われる道は。プーチンと、なあ、キム・ジョンウンを東本願寺の報恩講に呼べ。(会場笑い) それしかない。一人でも仏教者を育てること。

いつも言うように、自我を中心にして勝つか負けるかしか考えられへんのやぞ。戦争か平和かしか考えられへんのやぞ、人間は。戦争が悪いつちゅうことは世界中の人が知つとるぞ。なのに自分の平和の為に戦争するぞ。それは、そういう考え方しかできんからや。それを「超えよ」というのが仏教やからね。それを「どっちとも超えなさい」と。そうでないと自殺と戦争は超えられんと言つとるのが仏教なんだから、仏教者を一人でも育てることしかない。道綽そう言つとるんだ。ね。一人ひとりの、私たち一人ひとりのところの仏教、それはいのちから何か呼びかけてくるそれを手がかりにして仏さまの世界にまで目覚めなさい。それしか仏教はなからうかと。末法になれば、そして滅法になればね。そう言ってるわけです。

だから「**有縁の法に藉(よ)れ**」(東聖典219頁、西223、島12-62)と言うのは、いかにも、まあ広く言えば「縁がある法によりなさい」、こういう意味だけでも、それは実は「機教相応」ということを内容にしてる。ね。時代は末法、機は凡夫。それは本願の仏教しかないに決まつとる。それによりなさいということ善導大師がここでおっしゃってる。こういうことになります。

もうちょっと頑張りましょう。ここ大事やねえ。「**行者当に知るべし**」。理解するつちゅうくらいなら、なんぼでも勉強せいつちゅうわけよ。なんぼでも勉強したらええという。しかし「**もし行を学ばんと欲わば**」、本当に救われたいと思うんならば「**必ず**」、機教相応、「**有縁の法に藉(よ)れ**」。南無阿弥陀仏によって「**少しき功勞を用いるに多く益を得ればなりと**」。そして、こつからみなさんご存知の通りや。「**また一切往生人等に白(もう)さく、今更に行者のために、一つの譬喩を説きて信心を守護して、もつて外邪異見(げじゃいけん)の難を防がん。何者かこれや。譬喩は、人ありて西に向かいて**」というふうに、ここからみなさんよくご存知の「二河白道の譬喩」が始まっています。わかりますね。

そうすると私が今日申し上げてた、もうあまり時間がないのでまとめましょうね。申し上げていたことがおわかり頂けると思いますが、至心・信楽、至誠心・深心、ここで「二種深信」に決定する。そうですね。そして、回向発願心になると、これは実際問題です。そやね。仏教を生きていくときに、世間の方にうろろうしたり、なんかテレビ見とってみなさん腹立たんかね。わしゃいつつも腹が立つんだ。なんか偉い知識人じゃクソじゃ、バカばかり出てな、ほいでどうじゃこうじ

やああじゃこうじゃ言うて、わああわああわああ言うて訳がわからんやろ、仕舞いに。ああいうのは  
いかんのやな、あれ。まあ、言うてもしょうがない。

というふうに、この世の中の価値観は全部人を迷わす。そして、仏教でも聖道門というのは理想  
主義だから。迷わすというのはわかるか、理想主義やぞ。社会は、娑婆は必ず比べることが  
元になつとるから。自我の本質やから。比べるっちゅうことが元になれば、良い方がいいわなど  
考えても。だから僕もそうやったんや。あんな小さい寺に生まれてわしゃ嫌だと。坊さんなんか  
なるかと思ってどんだけ苦労したか。もっと立派な寺に入ろうと思うて、わしゃ一生懸命頑張  
ったけど、なあ、それはこっち側の問題やちゅうことがわかったわ。つまり、比べて良いことにな  
ろうとするんやったら生涯求めても実現しない。いいところも悪いところも丸ごと自分自身だと言  
えればいいわけで、それを仏教が教えてるわけやな。

だから、世間は全部理想主義やからね、僕らの考え方もそうなつとるからすぐそれに迷う。聖道  
門もそう。完全に理想主義です。菩薩になっていくんだから。立派な人に。だからあれも迷い。そ  
うじゃないんだと。そういう外道の考え方に惑わされない。それが回向発願心の出発点でしょ。そ  
うすると回向発願心というのは、これは、もう実際問題です。ね。ここは、至心・信樂によって大  
涅槃の覚りを得るんだと。そして、金剛の回向発願心、欲生心によって、この世を乗り切って生き  
ていくんだと。死ぬまでね、生きていくんだと。こういうふうになつてるわけです。『観経』も『大  
経』もそうやね。僕、脚色してないよ。

それはね、何故かという、凡夫は覚りを悟ることができない。これが大乘仏教の常識です。だ  
からさっき聖道門からは、「お前たちは五逆・誹謗正法・十悪・五逆の凡夫じゃないか」と。「それ  
が何で仏教がわかるんや」と、こう聞かれると。それは基本的に凡夫は覚りを悟ることができ  
ないんだということ、これが大乘仏教の常識です。そして、だからこそ、生涯仏教を歩むなんて無理  
なんだと。菩提心によって、聖道門の菩薩道を歩む、それしか道がないんだというのが聖道門の方  
の主張です。聖道門の方の主張というよりも大乘仏教全体の常識です。だから、これは、善導大  
師がこういうふうに、こっち側（『大経』：浄土門）は覚りを悟ることはできるんだと、凡夫でも。  
念仏によって。そしてその信心によって一生迷わされないで浄土に向かうことができるんだと言  
うのは、今言った大乘仏教の常識を背景にしながらいふことを知つていてください。凡夫は覚  
りを悟れない。だから凡夫なんて仏教を歩めるはずがないと、こういう常識に対して、いやそう  
じゃなくて、本願の仏教は凡夫でも他力の信心として涅槃の覚りが開かれる。それによって生涯、  
今日から転落しないで、迷わないで浄土に往く道に立つことができるんですと、こういうふう  
に言っていることになっています。それを知つていてください。

ですから、回向発願心のところは実に实际的だ。聖道門から非難を受けて、そしてそれによ  
って迷ってはいけませんと、こういう具体的な事例になつて、ということをよく知っておいて  
ください。それは今言ったように、凡夫と凡夫の非難に対してきちっと善導大師が答えてる  
から、それに則って親鸞聖人も「三一問答」で同じように展開していく。それをよく知  
っておいて頂きたい。

も一つだけ言つときます。もう一つは、明恵の『摧邪輪』（ざいじゃりん）を読むと、この  
三心積だけ飛ばします。ね。何故か。わからないからです。そうやね。本願がわからな  
ければ、何を言ってるのかようわからん。「機の深信」「凡夫」だつて言ってるけど、  
凡夫やったら救われるわけじゃないか。「本願によって救われる？」、「本願って何や？」  
というふうに、訳がわからないために、この三心積を『摧邪輪』の中では全部排除  
して触れていません。ところが、こちらからすると、ま

あ、言葉悪いけど、「お前バカか」と(笑)。な、「冗談じゃないぞ」と(笑)。仏教がわかるかわからんかの境目は三心釈じゃないかと。善導大師をよう読んだらわかるだろうと言うので、ここに長〜く三心釈を引用してます。そういう意味がある。聖道門の連中がわからないから。つまり、明恵が代表で、明恵の『摧邪輪』にここは無視してるということになると、法然を全くわかってないということになります。ここが核心なんだから。だからここを長〜く引用して、ここ、ものすごく長いでしょ、引用の中でも。しつこく長いでしょ。曇鸞の『論註』はほとんど親鸞が『論註』を引用しますけども、あれは親鸞しか専門がおらんからね。それから善導大師のここ(三心釈)だけしつこく長く引用します。そんなふうに、長く引用するのは、実はここが核心だからだと。それを明恵はわからんから言うて無視しとる。法然の爪の垢ほどもわかってないじゃないかというふうに親鸞は思ってると思います。ですからここにきちっと三心釈はこういうことなのよと。

まあ、複合的に色々と意味がありますが、とりあえず、親鸞天才です。けど、今日みなさんにわかってほしいのは、善導大師は天才やちゅうこと。『観経』を註釈してるけど、完全に『大経』に立って、そして『観経』の註釈を通して自分の信仰告白を「三願転入」でやってるでしょ。すごい。もう、そういうことがわかってくると寝られへんはずやけど。(会場小笑)夜中飛び起きて寝られへんぞ、ほんと。おう、なんか嬉しなってな。まあ、それをおわかり頂きたい。この「二河白道の譬喩」はもうわかっとうろが。な、くくだ言わんでも。これ読んどると長おなっていくから、だから、一応今日は、至誠心・深心・回向発願心まで行ったということにしましょうね。「二河白道の譬喩」はみんな知つとるから。わかろう。今のような課題を持って聖道門を、まあ、どう言ったらいいかな、聖道門の言う事は無視しとるんじゃないぞ。あれは逆さまなことを言つとんのやから、聞いても覚りを悟れんとお釈迦さん言つとろうがという、人間が逆さまになつとるちゅうことに目覚めた人が書いとんのやぞ。そやんね。まあ、あの、そういうことやと思いますが、ちょうど時間となりました。善導大師偉かろうが。ええ、まああれは天才やぞ。偉い！。

## 質疑応答

**田畑先生**・・それでは先生、質疑応答の時間を30分ほどですね。

**先生**・・はい、どうぞ。

**田畑先生**・・先生、私に質問させてください。私たちが読んだら、「有縁の法」と読むと、それが「機教相応」とか言うような、自分の中で展開ができないわけですね。それはやっぱり先生の教養によるのでしょうか。

**先生**・・いやいや、そうやなくてね、そもそも「機の深信」というのが「機教相応」の事実です。ですから私の教養じゃなくて善導大師がそう言ってるわけです。その「機の深信」をおさえるというのは、これは「機の深信」で、みなさん簡単に「自身は現にこれ」、「ああ凡夫やなあ」とか、「あ

っ、自力、役に立たんのやなあ」とか、こんなこと思うけど、そうやなくて「機の深信」があるということは、初めてこの世の中と一つになるということや。身が。

自力ばかりで生きて行って苦しんで行つとる。馬鹿な事ばかり言って、それが本当のこのように言つとる。全部嘘やと。初めてこのお釈迦様の教えによって、この嘘の世界全体を担える、私もそうやから、嘘やから、嘘の身やから。この嘘の身として時代全体と一つになったと言ってるから。「機の深信」とはそういう意味やぞ。

近代的な考え方から言うと「人間と社会」と、こうあるわけや。そして人間があつて社会があると、こう考えるわけや。そんなものは妄想であつて、本当に「機の深信」というのは「凡夫だ」「これは嘘ばかりの身だ」ということが初めてわかつて大地にひれ伏したら、その嘘ごと全体が世界全体やと、初めて世界を担える者になってゆく。世と一つになる。

それが「機の深信」だから、善導大師が二種深信の後に、回向発願心のところで、「有縁の法」というのは、その「機の深信」で頂いた法に違いない。だから説明するまでもなく、「有縁の法」と言ったら「機教相応」。末法の世を担ってゆく主体になったんだ。「**いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし**」(『歎異抄』第二章)と言った時に初めて世と一つになった。そしてこの世の間違いを全部背負って、「私は仏者としてこの世の中全部救われるまで、最後まで俺は仏法を褒めていくんだ」と。こういうことですから、機の自覚というのは、これは末法の自覚でもあり、世の自覚でもあり、「機教相応」の自覚でもある。それを機の自覚として言葉で言えば、こういうことだけれども、今言った内容を持っているから、善導大師が「機教相応」と言えば、当然、「有縁の法」と言えば、今言った機の自覚を持った人の、

**田畑先生**・・「依正不二」とか「身土不二」ということが機の中にも含まれて、機という受け止めが大事だということですね。

**先生**・・そうです。そうそう。そうです、そうです。機と言っても単なる人間というわけではなく、人間というのは人間という個人ないぞ。世を生きとる、時代を生きとる。その時代と私とを離して考えるから、普通は。そうすると、我がまま勝手な事ばかりして人間が生きていくから、プラスチック捨てるは水俣のような病気が起こるは、環境と自分は別だと考えとるけど、本当は、事実の一つだから、国土が死んだらそこの人は皆死ぬ。身は一つだから。その身と土と世と時代、これ一つだというのが「機の深信」の内容です。

**田畑先生**・・それがもう、「縁起の法」はそのことだけ、そのことの実実ですね。

**先生**・・そうです。その通り。そういう意味で二種深信の後に「有縁の法に藉(よ)れ」と。善導大師が言うんだから。今私が申し上げたようなことが「有縁の法」の内容だということになります。

**田畑先生**・・ありがとうございます。

**先生**・・他に何かある？

**質問者 1**・「有縁の法」ということについて「待対の法」という言葉を先生がおっしゃった。あれは「ジタイ」と読むんですか？ 「タイダイ」と読むんですか？

**先生**・何のことや？

**質問者 1**・えっと、218ページ（東聖典）の5行目の下、（西222、島12-62）

**先生**・あっ、ジタイの法（「待対の法」）か。対峙しているという意味やろ、意味は。

**質問者 1**・対峙しているという意味ですか。

**先生**・あ、そうそう。

**質問者 1**・これは何を言ってるかよくわからないんですね。これと「有縁の法」と相対して出て来ているように思うんですね。これどういう意味でしょうか。対しているという意味ですか。

**先生**・そうやねえ、言葉から言うと、

**質問者 1**・それから、読み方は「ジタイの法」と読むのが正しいんですか。

**先生**・そうしか読めへんわね。

**質問者 1**・「タイダイの法」と読めませんか。

**先生**・「タイタイの法」か。

**質問者 1**・そう読むのでないかと思いました。

**先生**・ああ、そうかもしれん。ごめん。「タイタイの法」と読むということか。

**質問者 1**・そう読むと思いました。

**先生**・ああそうか、ごめん。それはそれでいいと思う。「タイタイの法」（「待対の法」）かもしれん。  
（※西聖典（註釈版）222頁には「たいたいのほう」とルビがふられ、待対＝相対の脚注あり）

**質問者 1**・それで、これは例を挙げてずうっと上に例が挙がってますが、一つひとつの言葉の意味はわからんではないけれども、流れとして何を言ってるのかよくわからないんですね。

それと、「有縁の法」との絡みがよくわからないんですね。

**先生**・・・いやいや、岡田先生（質問者1）が言ってる通りやね。これは「タイタイの法」と読むんやわ。そして、ここの意味は、わからんちゅうのはわからんはずや、これ仏法不思議の話ししとんのがからな。だからこれは、たくさんの「諸仏の教行數（かず）塵沙（じんじゃ）に越えたり」から始まるうが、「答えて日わく」と。

「諸仏の教え、実践は、ガンジス川の砂の数ほど、塵のほど越えてたくさんある」と。

「識（さと）を稟（う）くる機縁、情に随（したが）いて一にあらざ」と。識を稟ける機縁の方も、私たちの機の方も一つではない、たくさんあると。ここから始まるんやね。

そして、「たとえば世間の人、眼に見るべく信ずべきがごときは」、眼に見て信じるということは、

「明（みょう）のよく闇（あん）を破し、空のよく有を含み、地（じ）のよく載養し、水のよく生潤（しょうにん）し、火のよく成壊（じょうえ）するがごとし。これらのごときの事、ことごとく「待対（たいたい）の法」と名づく。すなわち目に見つべし。千差万別なり。いかにいわんや仏法不思議の力、あに種種の益（やく）無からんや」。

これだけやね。そうすると、これは、諸仏の教えもたくさんあると。機の方もたくさんあると。そして、明かりが闇を照らす。空が全部を包んでいる。地が全てのものを養っている。水が全てのものを潤している。火が全てのものを壊す。これらのごときの事、皆ことごとく「待対（たいたい）の法」と名づく。私たちが見たらそうなるとと。

相対的に見れば、みんな火で燃えたりとか、地震で壊れるとか、全部そうなるとと。そうやね。だからそれは「待対の法」と名づく。すなわち目に見つべし。千差万別である。私たちが見た通り仏法にしる、それから世間の事も全部相対的に見たらそうなるとと。

しかし、「仏法不思議の力は、あに種種の益（やく）無からんや」。そういう相対の法を超えた仏法不思議の力は、実は凡夫が仏に成るとということやと。だからこういう「待対の法」というのは私たちは信じへんけども、そうじゃなくて、仏法不思議ちゅうのは凡夫が仏に成ると。本当は仏と凡夫とは「待対の法」で考えたら別もんやと。こう考えるのに、仏法不思議の力によって凡夫が仏に成っていくということが起こるんやと。だからそういう眼に見える「待対の法」とは違うんやと。こう言ってるんだと思うよ。

**質問者 1**・・・「随（したが）いて一門に入るは、すなわち一解脱智慧の門に入るなり」。

**先生**・・・うん、そうそう、それは『華嚴経』の言葉や。

**質問者 1**・・・それがどうつながるんですか。

**先生**・・・だから、今言ったように、凡夫ということに目覚めてね、そして仏法に救われていく。それは「待対の法」ではないから明恵がわからんわけよ。

**質問者 1**・・・ああこの一門というのは仏法の一門ですか。

**先生**・・・もちろんそうや。だから凡夫に目覚めて煩惱の全てを超えて行くという道が実現する。無碍道が実現する。それは『華嚴経』の言葉やで。

それでいいやろう。帰って考えや。他に何かある？

**質問者2**・・・一つお聞かせにあずかりたいと思っております。今日のお話に直接関係なくて、もう10年ぐらい前に色んな議論があったところでございますけど、親鸞聖人の750回忌の標語として先生は「今いのちがあなたを生きている」という標語をお作りになったと思います。それで非常に含蓄の深い言葉ですし、先生のお書きになったものを読ませていただきましたら、先生はいのちというのを「生物学的ないのち」と『大経』のいのち」と、二つに分類されまして、その「生物学的ないのち」というのは『大経』のいのち」というのを頂かないと本当に生きたことにもならないし、死んだことにもならんのだと、まあそういうご趣旨のことをお書きになっておられたと思います。

そして今日も『大経』のいのちからの呼びかけ」という一言が出てまいりまして、まあそういうことで、私、先生がこの「いのち」を主語にされて「あなた」を目的語にされて、こういう発想というのはいったいどこから出てくるんだろうかなと思ひましてね。

**先生**・・・はい、ええっと、弱ったなあ。あんまり内情を言うちやいかんのやけど、あの標語を決める委員会に僕は出席させられました。けども忙しいためにしょっちゅう出れなかった。それで僕がないときにあの標語が決まりました。なかなかまあ、趣旨を聞いてみると今先生がおっしゃったように、なかなかいい趣旨だから、居った以上は責任取らんなん。まあいいでしょうということで認めたわけです。

そしたらまあ、その中に居った何人かが、いやこんなんダメやと。俺はこんな標語なら責任取らんと言ったのが居りました。有名な人です。それしかしさあ、同じ委員会で多数決で決まったものを最後の最後になって俺は責任取らんと、それはどういうこっちゃ。まあ僕はヤクザっぽいですから（笑）、「おうわかった俺が責任取った」と言うて書いたのがあの本です。（『今、いのちがあなたを生きている』東本願寺伝道ブックス56）

ですからあの言葉がどこから発想されたかということも僕はよくわからない。けど私なりに理解して、ああいうふうと考えて、ああいうふうを考えれば親鸞聖人の仏教にきちっとかなうと思うて書いたものです。

**質問者2**・・・わかりました。親鸞聖人が一番大切にされた『大経』の、

**先生**・・・無量寿。帰命無量寿如来。無量寿に生かましよう。こういう意味であの標語を理解させてもらったわけです。

**質問者2**・・・わかりました。そして私がこういう質問をいたしますのはですね、先生がいのちっていうものを「生物学的ないのち」と『大経』のいのち」とお分けになって、それで、その「生物学的ないのち」というのは二つ私は考え方があってはないかと思っております。

一つは「機械論」という考え方でございます。「機械論」、これはフランスの哲学者のデカルト（1596－1650）が言い出した言葉でございます、ラ・メトリー（1709－1751）というお弟子さんがございまして、この人は『人間機械論』という本を書いております。それで、いの

ちと「機械論」というのは非常に違和感があるんですけども、これは18世紀半ばのヨーロッパというのはキリスト教が非常に強くて、支配していたわけでありまして、その哲学の中から自然科学が発達してくるわけでございますけども、その過程でいろんな自然科学が発達してきて、いわゆるその「万物は神が創造(つく)りたもうた」というものに対するアンチテーゼ(反対の意見・理論)として、その「機械論」。

だからデカルトは用心深くて、人間の身体を心と肉体と二つに分けている。その最初の出発点には神が居るんだ、けどその後は「機械論」なんだ。肉体というのは時計仕掛けで動く、そういうぐらいに考えていいんじゃないかと。ところがお弟子さんのラ・メトリーという人は「人間機械論」というのを述べたものですから、フランスから追放されて逃げていくんですね、オランダとかドイツに。そして非常に若くして早く死ぬ。まあそれが「機械論」の、非常に何と言いますか、違和感の強い言葉の一つでございます、それを現代に持ってきますとですね、たとえばいろんな人たち、一人には物理学者・エルヴィン・シュレーディンガー(1887-1961)という人が居るんですけども、この方は量子力学というのを考え出した人であります。

**先生**・・・要するに、人間のいのちというものを生物学的に考える考え方があると。その中に今言ったような考え方がありますよと、そういうことやね。

**質問者2**・・・はいそうです。

**先生**・・・それで、結論はなんなんや。

**質問者2**・・・結論はですね、もう一つそのシュレーディンガーという人は、「生命現象は神秘的ではなく、ことごとく余すところもなく物理と科学の言葉で説明できる、説明しなければならない」と。そういうのが、私は現代の「機械論」だと思うのです。これに対して「生氣論」という考え方がございます。これはドイツのハンス・ドリーシュ(1867-1941)という哲学者で神学者です。そしてしかも生物学者なんです。この人は何を勉強したかと言ったら、ウニの発生を研究したのですね。受精卵が二つに分かれて、どんどんどんどん分かれていくわけですけど、二つに分かれたところでそれを分けますと両方が完全に幼生なる。そういうのを見つけましてね、これ生物学では一番初めにこういうことを見つけた人で、そういうことを見ながら、これだけではないんですけども、生命現象というのは本当に物理と科学の言葉だけで説明できるのかということで『生氣論』という本を書いています。「The History and Theory of Vitalism」(『生氣論の歴史と理論』)ということを書いてまして、まあ一言で言いますと色んな概念、「調和等能系」とか「エンテレケイア」とか、神学の言葉が出てくるんで非常にわかりにくいんですけども、一言で言いますと「生命力」。特殊な生命原理があるという考え方です。

二つが対立しておるわけでありまして、先ほど言いましたシュレーディンガーとか、あるいは遺伝子を解析しましたワトソン(1928-)、クリック(1916-2004)なんちゅうのはもう徹底的にこの「生氣論」をいじめるんですね。非常に、

**会場から**・・・仏教とどう関係があるの？



**質問者2**・・・だからそこなんです。それで、その「生氣論」というのも現代の、

**先生**・・・あのね、その生物的ないのちについて、今言っているように世界で色々考え方があって、どうでも考えることができるでしょうね。生物的ないのちなんだから最終的に科学で説明することができるんだと言う人と、そうじゃないと言う人と居るのは、それはそうだと思います。そのことと「無量寿」ということとは何の関係もありません。

**質問者2**・・・何が関係ないんですか？

**先生**・・・何の関係もない。無量寿。

**質問者2**・・・無量寿。関係ない。それはわかりますよ。

**先生**・・・だから、何の関係もないことをうだうだ言うて何の関係があるんや。

**質問者2**・・・うだうだ言うておりますのはね、そういう二つの、

**先生**・・・要するに、質問は何や？

**質問者2**・・・だからこういう現象に対して仏教というのはね、どういう具合に答えることができるのか、どういう対応ができるのか。

**先生**・・・ああ、答える必要がない。

**質問者2**・・・ああそうですか。ハッハッハ、面白い。

**先生**・・・信心というものによって頂くいのちは無量寿ですね。それは生物学的ないのちを包んで、いのちを包んで私たちが最終的に救われていく拠り所としよう、それがいのちですよ。無量寿という意味ですよ。

それからお釈迦様が覚りを悟った第一声は「不死のいのちを得た」。「死なないいのちを得たんだ」と叫んだわけです。それは生物学的ないのちの解説をしてるんじゃなくて、そういう生物学的ないのちも全部包んでね、私たちのいのちの行くべき場所はどこで、どこから来たのか。

空海が言うように、いのちがどこから来てどこに行くのかわからんのだというような、そういう私たちの根源的な問題に答えるための無量寿といういのちと、今言う生物学的にどうだこうだという解説をして、科学で説明できるとかできんとかと言うこととは全然違うと思いますので、

**質問者2**・・・それはよくわかってます。うんうん、わかってます。それで、その、

**会場から**…先生ね、ちょっと言わせてください。僕は質問力検定1級ですから（笑）。あのね、先生が質問がはっきりわからないという前に、ここに集まっている人は、無量寿という私たちを生かしてくれているいのちの中で、私たちが無我の状態であるんだという、その生命論に賛同した仏教の話しで来ているわけですよ。だから先生もその前提で質問されないと、いつまでたっても混乱するから延塚先生も答える必要もないと言うし、それはいろんな切り口がありますよ。でもやっぱり一つの共通の中で質問されたらいかがでしょうか。

**先生**…いやいや、あのう、そうじゃなくてね、たとえば科学的ないのちの見方、あってもいいと思います。そしてそれで解説してもいいと思います。しかしそれでは救われません。

**質問者2**…うん、救われたいですね。よくわかってます。ただね、現代の生命科学っていうのはものすごいスピードで進歩しているわけですね。いろんな生命現象を人間の言葉で色々説明するんだけど、それをトータルとしていのちがなぜ成り立つのかというのはね、科学ではわからないんですよ。

**先生**…だから、私たちがどこから生まれてどこに行くのか、そして私たちはどういういのちとして助かっていくのか、それをお釈迦様に聞きましょうと、こういう意味ですけども、無量寿というのはそういう生命学的ないのちを包んでね、生命学的ないのちというのは、はっきり言うと、自我で計算したいのちです。自我で一生懸命詮索したいのちです。

**質問者2**…いや先生ね、生命科学が言っているいのちというのは自我とかじゃなくて、

**先生**…科学というのは自我が前提でなければ成り立たない。

**質問者2**…ああそうですかねえ。

**先生**…当たり前や、犬が見てそう思いますか。犬が見て同じような意見になると思いますか。犬は自我がないから。

**質問者2**…ああそういうことですか。

**先生**…東大で博士号を取ってバイオの研究をしている僕の学生が、私が東京で講義をしている時に来まして、「先生、バイオの研究というのは遺伝子を組み替えるんやけど、そんなことしたらあかんやろうね」と言うから、「あかんあかん」言うたら、彼は多分バイオの研究でもう世界中の博士号を取っていたから、そっちの道に行ったら多分彼は有名になっていたかもしれんと思うんやけど、一緒に飲んでいる時に「私は大谷大学に行きたい」と。「今までは客観的な事実に基づいた科学の研究をしてきました」と。けどもこれからは主観的な、なにか宗教というのは主観的だから、不安です」と。こう言いました。一応それはそうですね。「おう、科学って客観なんか？」と言ったら、「客観です」と。「どういう意味で客観か？」って言ったら、「はい、先生は170センチで60キ

ロ。これは絶対に間違いないデータですから、それに則って研究をするんだから科学は客観です」と。こう言いました。

「おう、そらそうかもしれんけど犬がそう思うか?」「猫が170センチで60キロってわかるか?」。それは人間という自我が前提になって、世界中の人間は自我を持っているから、その自我という事を前提にして客観的なデータを言ってるだけで、自我が無くなったら客観データでも何でもない。

科学は客観でも何でもありません。それは「仮」(け)と言うんです。仏教ではね。仮に正しい。なぜかと言うと自我ということが前提になっているから、仮に正しいんであって、もし本当に科学が正しかったら他の動物、他のいのちにも正しいはずだから、環境破壊は起こらないはずです。人間のくそわがままなことをやっているだけです。科学なんて何にも客観ではない。自我の妄想です。

そういう意味からすると、お釈迦様の真理というのはやっぱりすごい、と僕は思います。それで少し考えてください。申し上げていることわかりますね。

**質問者3**・・先生ありがとうございます。あのう、法然聖人が浄土門から独立させて浄土宗を興されたんですけど、善導大師はそういう意味で中国で浄土門から独立して、浄土教を、思想を独立させたということですけど、教団は興されてないわけですか。

**先生**・・そうです。

**質問者3**・・はあ、じゃあ失礼ですけど、七祖の内の龍樹とか天親、曇鸞、道綽とかずっと来られますけど、みなさん教団は興しておられないわけですね。

**先生**・・そうですね。

**質問者3**・・はあ、わかりました。ありがとうございました。

**先生**・・あのう、思想的にはね、これは親鸞聖人の『教行信証』をよく読むとわかりますが、それから法然のお書きになったものをよく読むとわかる。法然は「道綽と善導に専ら依る」と。それは外さないんですね。そして道綽は何よりも大きな仕事をしたのは浄土教から独立させたことやと。思想的に。だから、「**道綽決聖道難証**」(「正信偈」)。聖道と浄土とを分けて、さっき言った『大集月蔵経』によって末法ではもう浄土教しかないのやぞということを宣言した人。それが道綽やと。

ところが、まだ学問としては完成してないから、だから親鸞聖人の道綽の引用の所を読むと、道綽のところは全部「念仏三昧」になっています。「念仏三昧」というと、これは聖道門の仏を観るということなのか、それとも「称名念仏」なのか区別がつかない。時代的に道綽は全部を包もうとしたために「念仏三昧」という言葉で統一されていきますが、善導大師になるとご存知のように「六字釈」。南無阿弥陀仏一つを立てた。そこに浄土教、『観経』の浄土教が完成していく。

聖道門と浄土門の違いはいくつもありますが、一番大事なのは行の違いです。菩薩道の行なのか、称名念仏なのか。その称名念仏一つを立てて『観経』によって浄土教の教学を完成させたのが善導大師だというふうに法然は言います。ですからおっしゃるように、思想的には中国で道綽が独立さ

せ、善導が浄土教の教学を完成させた。しかし、現実体として中国ではそれが現実体になってなかった。それを引き受けたのが法然です。だから法然はこの世で現実として浄土教を、道綽・善導が思想的にやった仕事をこの世で実現しようとしたのが法然です。

そういう意味ではおっしゃるように、中国では思想的には独立し、完成してただけでも、それが全体に行き渡るような現実体として実現しなかったと思います。

**田畑先生**・・それでは時間が過ぎましたので終わりたいと思います。最後に「恩徳讃」で終わりたいと思います。

**先生**・・今度は4月やろう。桜が咲いとるぞ。まあ、とりあえず元気でね。お元気で。また会えたら嬉しいですね。ありがとうございました。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 （恩徳讃、終了）

【テーブル起こし】：都瑠仙一さん、田中志津子さん、江本真人さん、  
熊谷明美さん、伊藤育代さん、住職

【添削】：田畑正久先生、住職